

狼藉の間、三絃に嬌を賣るものもなきにあらざれば一夜を此所に明かすも又一興なるべし。

津輕案内

雨の家

温泉の性質は、鹽類泉に屬し、舌に觸れば鹹味あつて少しが味もあるやに思はれる、之に浴しての効能はどく云へば、梅毒、瘡毒、疥癬、疝氣、痔疾、痛風、胃病、婦人諸病、僕麻質斯等であるが、鐵道の便ありと雖も、餘り片鄙なる故か、其名は未だ遠く廣まらないのは殘念だ。

○旅館では山形屋、料理店では柏屋、温泉宿では大瀧、新瀧、その重なるもので、客室も多く小綺麗な座敷作りである。卓上に珍味ありて、肉は後山の獲物の鮮しきを食ふべく、魚は小名濱の網にとれし銀鱗濱刺たる毛布連の米、味噌、醤油杯携へて、来る者のお宿が多い。

○さて其位置は、日本鐵道常磐線の中央で、水戸より五十三哩餘にして、湯本停車場あり、郵便電信局わりて、交通には至極便利である、上野より海岸線を経て奥州地方に至らんとする諸君は、此處へ降りて一泊數浴を試み給へ、停車場は下車駅なれば、切符を買換ふる手数はいらない、浴料は無論無賃で、宿料も普通一泊四十五錢、其以上は御望に任す、中食料は二十錢乃至二十五錢、酒一本九錢より十二錢まで種々ある、不盡

◎津輕は以前十萬石の地で東、中、南、西、北の五津、輕郡と青森、弘前の二市に別れ、名所舊跡が隨分あるにわざりて簡便に御案内致しません。

○青森市 青森灣に臨み、外が濱邊の一市街で東京を東北に距る百九十一哩廿町、鐵路一晝夜で來られる、又一葦海水を隔てた國館と日毎に汽船が往復して内地から北海道に渡る要津である。昔は烏頭、安瀬、多聞天、堤の荒寥たる四漁村であつたを寛文年間津輕信牧その臣森山彌七郎に命じ、始めて港を開かしめてから次第に繁昌し、明治四年弘前、七戸、八戸の三縣を合して青森縣廳を此地に置かれてから益々般賑となり、士の濱とまで呼ばれたのにも似ず町數二十餘、戸數四千餘となつた。

源 賴 朝

廣田、八幡、天満等の郷社と猿賀、岩木山の分社及び
數ヶ所に稻荷社がある。

善知鳥縣社、諫訪、恵比壽、香取、神明、
善知鳥社は當市の總鎮守で、鳥頭安
瀉の傳説があつて、善知鳥と云ふ鳥
が住んで居るとの口碑である。

讀人しらず

陸奥の奥床しくも思はゆる
壺の石ぶみそとの濱かせ
旅館先づなめりまきを下車すると安方町で此町には
かざや支店、早瀬支店、山仙支店、
又新安方町へ來ると、鹽谷、大サ、
和島、中島の四支店がある。
總て支店は汽車から下直ぐ汽船にの
るには便利なれど市中に用向がある
とか名所舊跡を尋ねるには市端で不
便である。其他頗る多し。中にも鹽
谷、かざやは客室廣闊、庭園靜美、
萬事懇切である。中嶋、早瀬も之れ
には劣らぬ、其他茲に揚げたのは皆
それぐの長處、特色がある。
◎遊廓は處在地を柳原と云つて、
開明樓、青灣樓、富士見樓、米山樓、
國屋、和洋亭、東奥館等有名である。
◎料理店には濱町の金森樓、紀伊
國屋、和洋亭、東奥館等有名である。
松葉樓等は有名で、一等十三戸二等三戸三等二十戸
娼妓は百九十餘人である、元は鹽町であつたを明治
十二年此地に移された。

山を望む。
香取社は声
よろし、又

山を望む。
香取社は声
よろし、又

である。
浦町神明社は南面一圓の田圃で、日暮樹陰に立てば青田から來る風に吹かれて、荒川高田諸村から立のぼる淡き濃き炊煙を眺むるなよろし。

◎寺院には常光、正覺、蓮心、蓮華、阿彌陀、光行、安定の七寺と一念坊である。常光寺の庭園と壯嚴、正覺寺の古池、蓮心寺の古松、蓮華寺の盆栽は一見の價は十分である、一念坊は破れはてたれ共昔は榮へた寺で故實もあるさうだ。

◎青森八景は出來であるとの事だが忘たので拙者の鄙見を並べたが、其當を得ぬであろう。
○堤壠橋の初雪。蓮華寺の晚鐘。善知鳥の夜雨。浦町神明の青嵐。石森橋の夕照。
○合浦公園は市の五六十東で招魂社、築山、四阿及び數箇所に諸名士の碑石があつて、青森灣にのぞみ、東に八甲田山、西南に岩木山を眺め、春は櫻、夏は蝉、秋は紅葉、三季三絶の景があつて一面に芝生なれば坐しても砂塵に冒されることはない。

◎東津輕郡即ち青森近郊には、

三日で一週とする、白雲館は有名の浴室である▲外山は二里餘東南で風景に富むが浴舎は完全せぬ。
○神社妙見の大星社は南一里で境内的樹木老ひ茂り、絶壁の所なむ仙界の様めぐりは興味がある▲酸湯は南七里餘で交通は甚だ不便な山中なれば馬で漸く往來をする、湯の功能著しく出かける▲野内の貴船社は東二里▲小港の雷電宮は東山ともいふ。七里餘共に境内樹木老ひ茂り、絶壁の所なむ仙界の様にある。
○八甲田山は津輕南部(今は上北郡)の境にある、高山で、八峰蓮華の如く屏列し頗る峻嶮である、又八甲山とよい。
○佐山は東南一里餘樂師堂があつて舊四月八日は参詣人群集する。
○高田松原まめや坂は共に昔時の弘前街道で市の二里餘南にある。
○平内近海は東七里餘山の麓で風景に富む。
○城趾新城は一里西南▲横内は二里東南共に津輕爲山がある。

名家墳塋

細江生

●濱松驛にて下車し、瘠松枯草茫茫たる味方が原四里を北に貫き、引佐細江の湖畔なる氣賀町に到れば、小里にして井伊谷村に達す。

●宗良親王の御陵(官路中社)井伊谷村の中央にあり、境内老杉翁鬱として晝尚暗く、陵邊の櫻花年毎に匂へども、絶えて世に知られるぞ悲しき。

君の爲め世の爲めなにか惜しからん
捨て、甲斐ある命なりせば

信藩地一統の折陥落せしめた城趾である。
○入内觀音は西南三里餘に上磯諸村は西北に當る海岸で舊松前街道である▲仁井田松原は市を一里餘▲油川は土俗大濱といふ同二里で棧橋がある商店軒を並べ青森から先に開けた港である▲蟹田は同じく七里▲平館は同十里で燈臺がある十五里餘で茶色或は白色種々の透明な石が濱邊に布散してある今別石といふ買へば壹升十錢位で爐に筆にはつくせぬ難所である。

▲今別は十五里餘で茶色或は白色種々の透明な石が濱邊に布散してある今別石といふ買へば壹升十錢位で爐に筆にはつくせぬ難所である。

又は植鉢に布いて珍重する▲三厩は十八里餘で昆布を産し、味甘く天鹽産にまさる▲母衣月、三吉越は道路險惡、浪の去るを待つて急ぎ次ぎの岩洞に入るなど實に筆にはつくせぬ難所である。

○外が濱邊義經、辨慶の古跡が多くある、義經が馬を繋いだ木といふは上磯今別村にある、銀杏の大木で、辨慶が手を押した石といふは、酸湯へ通る靄谷村の近傍で、大きな手の形が凹くなつてゐる、其他まだくあつたが忘れたから、わかり次第御案内致しませう。

「此の次ぎは弘前及び中津輕郡です」